OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文彩(あや) : 相互作用説再考
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 1983, 4, p. 11-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8814
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八三年二月〕
『年報人間科学』第四号　一一頁―三二頁

文(あ)彩(や)

――相互作用説再考――

菅野盾樹

文彩（あや）
――相互作用説再考――

序　論　文彩がなぜ問題か、いかにして問題になりえるか
第一章　隠喩的意味は存在するか
第二章　隠喩はどのように解釈されるか（以上本誌第三号所収）
第三章　隠喩は言語にとり余分か
第四章　隠喩の基準とはなにか（以上「大阪大学人間科学部紀要」第九巻所収）
第五章　相互作用説再考（以上本号）

第五章　相互作用説再考

これまでにわれわれはしばしば、今や多くの論者によって隠喩の古典理論と目されている、ブラックの相互作用説に言及した。発言の象徴指標にかんしても、それが貴重な示唆を含むことは、今しがた（第四章）見たところである。ここで一章を割いて、あらためてその立入った検討を行うことは、修辞論の理論としての命数をはかるうえでも、またもしも修辞論に不足があるならば、それはどのようなものでありどのような手当てを施せばよいかを診断するためにも、有意義であると思われる。

相互作用説再考は以下のような段どりにしたがって運ばれるだろう。まず、問題の説の記号論における位置が標定される。ブラックの発言にたんねんに耳を傾けることによって、相互作用説が語用論以前的（prepragmatic）水準に自らの場所を持たぬことが明らかとなるだろう。ついでブラック説の先蹤というべきリチャーズの考察にも目をむけて、両者が異口同音に唱えた説の良質な部分と、必ずしも良質とはいえぬ、むしろ劣等な部分とを明確に区別する。われわれは相互作用説のそのような両面が、ともども修辞論の見地へ収斂することを示唆するつもりである。最後に、サールのブラック批判を傾聴しながら、むしろそこから相互作用説への裏書きが抽きだされること、サール自身の見地にこそ問題が伏在すること、これらのことを示そうと思う。相互作用説批判の再批判をつうじて、隠喩のありのままの形姿がわれわれの目の前に浮ぶことを、われわれはつねに期しているのである。

隠喩の「相互作用説」の名を一躍有名にした問題の論文「隠喩」（一九五四年）の冒頭に、ブラックは隠喩考究の視角があくまでも隠喩の「論理文法」にあると明言し、この視角から問題となる事項を、つまり問題を、列挙している。それらがいずれも隠喩を考えるうえで大変有意義である事情は、並べられた「問題」を通覧すれば

誰にでもたちどころに明らかである。それなのに、これらの問題の列挙の仕方そのものに、隠喩の学の輪郭がなにほどかすでに描きさだめられていることを、人は見落しがちである。ところがどの問題でも手にとってじっくり眺めてみれば、それが己れにふさわしい学をふさわしくない学からきっぱり弁別する態の問題であることに、おいおい人は気づかされるだろう。彼のあげた問題とは具体的には次の六つに及んでいる。

隠喩の事例をわれわれはどのようにしてそれと知るのであるか
隠喩は字義的表現へ翻訳できるのか
隠喩は副えものの飾りとみなしうるか
隠喩と直喩の関係は何なのか
どのような意味で隠喩は「創造的」なのか
隠喩を使用する目的は何か(二)

隠喩の「理論文法」を云々するとき、ブラックの念頭にあったのは隠喩の言語分析である、と言うだけではあまりにルーズにすぎよう。たしかに方法論的省察が論考中で主題として表立たせられているとはいえない。しかし文脈のはしばしで彼がそれに十分意をもちいていることは明らかである。そうした散在する措辞から推して、彼の言う隠喩の「論理文法」が現今の記号論の領域区分における語用論以前、すなわち意味論なり構文論なりに属さないのは確かだと思われる。これは相互作用説を評価するうえで決して些細な点ではない。のちに見るように、とくに相互作用の具体内容をどのように捉えるか、という問題に、この点は波及して多大な効果を生むだろう。問題が己れにふさわしい取扱いを要求する事実を、ブラックの並べた第一の問題に即して確かめておく。それは隠喩の同一性の基準とは何か、と訊ねているのである。前章で隠喩の指標として焦点／枠という区別がとりだされた。ところでこの区別は、いわば真空中に置かれた文に内属するわけではなかった。それはあくまでも発言行為により日の目を見たかぎりでの文、型代文のになう性状にほかならない。型代文の性状にはそれに内属するものもあれば（たとえばそれが音声であるかぎりで有する音圧）、話す主体との相互作用のうちに生起する性状、つまり「相互作用特性」とラコフらがよぶもの(2)（問題の区別はこれに数えられる）もある。この二つの混同をさけるために、焦点／枠の区別を云々しない方がよいかもしれない。なぜなら、そうすることによってややもすればその区別が型代文に――話す主体と没交渉に――貼りついているかのように考えがちだからである。かわりに、隠喩まじりの文は焦点化を施されると言おう。〈焦点化〉はものの性状であるよりは、人とものとの交渉によってものが立ち現われる姿を指すのである。

ラコフらは相互作用特性を説明するのに模造ピストルを例にしている。〈模造である〉という述語がたとえば〈黒い〉などといちじるしい差異を示すことは、二三の簡単な推論を眺めてみれば明らかだ。「これは黒いピストルだ」からは「ゆえに、これはピストルだ」がすぐに抽きだされてくるが、「これは模造ピストルだ」からは「ゆえに、これはピストルだ」ではなくてその否定、つまり「ゆえに、これはピストルではない」が出てくる。注目すべきなのは、このよ

うな推論からは一体「模造ピストル」がどんなものか、すこしも積極的な事柄が抽き出されないという点である。模造ピストルはピストルでないばかりか椅子でもないし、林檎でもない。それはおよそ何物でもないのである――模造ピストルである以外は。ところで、銀行に押入った強盗は模造ピストルをいかにも本物らしく店員に思わせることができるし（つまり、模造ピストルはピストルに似ているのだ）、本物でもって遂行しうる目的の若干は贋物も立派に果しうる（すなわち、店員の脅迫）のである。反面、それは本物のピストルのように、人を殺傷するという機能を果しえないし、またそもそもピストルとして造られたのでもない。ピストルとして製造されたにもかかわらず殺傷の働きをなしえぬのは、故障した、もしくは出来損いのピストルであって、決してその模造品ではない。要するに述語〈模造である〉はピストルの性状のうちあるものをうべない他のものを否定するのである。われわれは以上の観察から〈ピストル〉という概念が「特性の多次元的形態（ゲシュタルト）」(3)で規定されている事実に気づかされる。外形の類似は知覚的特性であり、ピストルらしくそれを構えたり突きつけたりしうるのはその運動的特性とでもいうべきものによってであり、そして脅迫の道具にそれを用いうるのは、その目的特性のおかげなのだ。これらの特性はあたかも黒さのようにピストルそのものに内属してはいない。ピストルならぬその模造品も、それらを有しうるからである。こうした特性は「われわれがピストルと相互作用する仕方にかかわるのだ」(4)。

話を隠喩へもどそう。まえに次のような例を引きあいにだしたことがある。

(1) I have climbed to the top of the greasy pole （かって脂だらけの柱の頂上まで登ったことがありましたっけ）

英国の宰相ディズレイリが口にしたこの発言を、聞き手は隠喩と解すべきだろうか、それとも字義通りにとるべきだろうか。この問題を考えるさい、われわれの仮定はこうだった。事実、宰相はかってつるつる滑る柱を登りつめる競技で勝をきそったことがあること、そしてこの事実は聞き手も承知しているということ。仮定によって(1)には何ら意味上の異例さもなければ、真である平叙文に比して何ら劣等な箇所も持ちあわせてもいない。要するに(1)は真なる文である。にもかかわらず(1)が話し手によって隠喩として意図され聞き手にそう理解される可能性を打消すことはできない。ディズレイリは(1)を片目をつぶりながら言ったのかもしれないし、greasy に強調を置いてそれを発音したのかもしれない。とにかく(1)を実演する特有の形態がそれには伴っていたにちがいない。換言すれば発言(1)の語るものに加えてその示すものが(1)の意味へ寄与しているのである。語るものの平面に(1)を置いていくら眺めてもそこに焦点／枠の区別を見出すことはできない。しかし語りと示しとが共々意味に与かる平面に(1)を置き直してやるとき、(1)にその区別が判然とそなわるさまが見てとれるだろう。聞き手は話し手の意図を了解（アプテイク）することによってはじめて問題の語の焦点化に成功する。(1)は贋のピストル

とある意味で似ている。すなわちどちらもたくまれた所産なのだ。この点で両者はたとえばわきあがる黒雲が雨の記号であるという意味では、何か事態の記号であるとは言えない。しかし別の点で両者ははっきり区別される。強盗が持って構えるピストルが実は模造品にすぎないことが店員にわかった途端、模造ピストルは記号としての威力を失う。それが本物と見なされているかぎりにおいて、模造ピストルはさまざまな事態の記号でありうる。たとえばそれは〈もし強盗が引金をひいてピストルを発射するならば、人が殺されるかもしれぬ〉という可能的事態の記号である。しかし言うまでもなく、模造ピストルは撃てない――それが模造と見破られた途端、記号を生気づけた意図はついえてしまうのだ。一般化して言うなら、この種の記号に伴う意図はつねに秘められていなくてはならないのである。これに対し、(1)を隠喩として通用させるには、(1)に伴う意図はつねに秘められることなく、あらかさまでなくてはならない。この種の意図により生気づけられる意味を、グライスは〈非自然的意味〉(non natural meaning)と呼んだのである(5)。

(1)が隠喩である、という性状は、(1)が十語からできている、という性状とは別箇である。後者が発言に内属するのに対し、前者は決してそのような仕方で(1)に帰属してはいない。〈隠喩である〉という述語はラコフらの言い方を借りれば相互作用特性を代表するのである。ただしここで言葉づかいの曖昧さには十分注意しなくてはならない。「人間は狼だ」を例にしよう。人は時にこの発言全体を指して「隠喩」と言うこともあれば、とくに述語(「狼だ」)をその名で呼ぶこともある。述語はまえから述べている区分で言うと〈焦点〉に属する。したがって理論的には、「隠喩的」なり「隠喩である」といった述語的表現を「焦点」と同義に使用するなら、これとは別に隠喩なるものを考える手間ははぶくことができる。というのも、発言全体を「隠喩」と称する前の用法は、もしも一つの焦点＝隠喩につねに一つの発言が対応するならば、理由を失うからである。この点はしばらく後考に俟つことにしたい。隠喩という性状が明らかになった今、再び(1)の解釈のプロセスにもどって、それがどう運ばれるか眺めてみよう。ディズレイリが(1)を発言した場合、聞き手はその解釈について両様の可能性に直面する。一つは、宰相が字義通り昔の行いを回想して述べているにすぎない、と見ること。二つは、話し手は過去の己れの行為にことよせて、実は波瀾に富む政治史の一こまについて暗に述べている、と解すること。まえにも述べたように、どちらの可能性により見込みがあるかは、どの解釈が有意性原理にかなうかによっている。話し手と聞き手に分ち持たれた知識、会話の文脈、それに話し手の表情、仕草、声調などによって、(1)に焦点化という相互作用特性が実現するか否かが決められるだろう。しかしこのことは、もし(1)が隠喩まじりの発言である場合、(1)に本来帰属していなかった一つの性状が外部から押しつけられたというようなことを意味しない。(1)が隠喩であるなら、その発言は本来そのようなものとして己れを示したのでなければならない。ポイントは、われわれがすでに語用論以後の(postpragmatic)水準に立って、そこで事象を観察しているという点である。(1)にか

んして相互作用特性とその他の特性を区別することは、両者がいわばリアルに(1)に帰属する点について、何の差別を設けるものではないのである。

ブラックはたしかに隠喩の「論理文法」の身分について多少な曖昧な態度を示している。彼は隠喩の例をいくつかあげ、それらを「文」(sentence)と呼んでいるが(6)、その真意が発語の状況を背景にした型代文(sentence token)にあることは、彼の考察がつねに具体的な会話の場面でなされていることから、ほぼ疑うことができない。しかし彼は別の箇所で、隠喩の考察がその意味をめぐるものである以上、それが構文論ではなく意味論に属する、と注釈を加え(7)、多くの隠喩が記号使用者やその出現する文脈(話し手の思考、感情、なかんずく意図)への言及なしに処理しうる、とわざわざ明言している。ところが同時にブラックは、隠喩の解釈にあたって話し手の意図が斟酌されねばならぬ事例があるとも指摘している(8)。いったいこうした態度の使い分けをどう評価すべきだろうか。われわれの結論をここで先廻りして言えば、ブラックは隠喩の意味論的考察の限界についてつきつめていなかったためにいささか態度がゆらいでいるが、しかし結局のところ隠喩の学が語用論以後に属するとの見通しを持ちこたえた、と評すべきである。

彼が多くの隠喩は意味論で処理しうる、と言うとき例に引いたのは

(2) A man is a cesspool

(人間は汚水溜めだ)

といった類いの隠喩である。この例でブラックが考えていた論点をどのように表立たせたらよいか。実は、問題の論文そのものにこれについての説明は欠けている。そこでその真意を忖度する以外にはないが、おそらくこれまでにも触れた、変形生成文法で語られる〈選択規則違犯〉という考え方が彼の論点を代弁してくれると見てよいと思われる。この規則は語の文中への出現を制限する機序として要請されたものである。たとえば「その女は泣いた」と「そのπは泣いた」という二文を比べてみよう。後者は一見して異例であって、通常このような記号列は文とはみとめられない。なぜそれが文としては排除されるかと言えば、そもそも動詞「泣く」が特有の選択素性(selectional feature)、すなわち主語として生き物を言う語しか戴かないという特性を有するからである。他方それぞれの文で主語に立っている名詞「女」、「π」にはおのおの〔+[生物]〕、〔−[生物]〕という構文素性(syntactic feature)が属している。結局問題の文の異例さは、動詞と主語双方の素性が合致しないことに起因するのである。以上が選択制限という考え方のあらましであるが、ブラックの例(2)が選択規則に違犯していることはあらためて言うまでもないだろう。そこでチョムスキーは、まえにも述べたように、こうした違犯が時として比喩と解釈されることがあること、それゆえ選択規則違犯が記号列から絶対的に文の資格を奪うわけではないことを認めたのである(9)。

選択規則違犯が隠喩の必要条件でも十分条件でもないことはすでに述べたので、この点の論証を繰りかえすことはしない。われわれの見地にとって肝腎な点は、チョムスキーのような考え方が、そうしておそらくブラックが暗に抱いているとおぼしき考え方が、語用論以前の水準で組み立てられていることである。彼らの失敗は、しかし、修辞論の見地から救うことができる。チョムスキーは選択制限違犯の文が「しばしば」(often) 比喩として解釈される、と述べたが、たとえそうした違犯をもって語用論以前的に隠喩を基礎づけることができないとしても、この観察そのものは正鵠を得ている、と言わなければならない。同じように、(2)は場合によって隠喩である見込みが非常に高いのである。であるなら、この事実を合理化しなくてはならないだろう。そして、現象を救うには修辞論の見地に立たねばならないことは、前章に説いたとおりである。

ブラックが隠喩の意味的探究よりむしろその語用論の必要をより重大にうけとめていた節は、たとえば次のような彼の言い方にも認められる。隠喩の解釈にあたって、話し手の意図が考慮されねばならぬ事例もある、「なぜなら、標準的用法にかんする一般規則は、必要な情報を提供するには広すぎるから」というのである(10)。彼は言う。チャーチルはある名高い警句のなかでムッソリーニを「あの道具」(that *utensil*) と呼んだ。この隠喩はたんなる語用論以前的規則のみでは解釈できないのであって、そのためには話し手の声調(トーン)、発語の道具立て (verbal setting)、歴史の背景などを斟酌しなくてはならぬ、と。彼はつづけて、こうした例では、発語の特殊個別的な使用が理論へ組みこまれるべきであって、いわゆる「言語規則」だけでは隠喩を正しく処遇しえぬこと、したがって、その意味で意味論よりむしろ語用論に属する隠喩の意味が存在する、と明言しているのである(11)。ブラックの見解に手直しすべき点があるとするなら、それは言うまでもなく、隠喩の種類によって意味論と語用論とを使い分けるという発想である。実際われわれは隠喩の意味論に理論的限界が課せられていることを見届けている。それゆえ種類を問わず、隠喩は全体として修辞論の見地から考察されねばならない。ちなみに問題の論文から二十数年の後にものされた論考では、もはや隠喩の意味論ということは一切いわれず、かわりに語用論の統一的見地が色濃く押しだされていることを、ここで申し添えておこう。この新しい論考については、のちに触れる予定でいる。

隠喩探究の方法論的視角はひとまず正しい方向に設けられた。ただちに相互作用説のなかみの吟味にとりかかろう。はじめにブラックの命名にかかるこの説の先駆者リチャーズの見解を調べることにする。それは、ブラックの説が先人から何をうけつぎその不備をどのように克服しているか、この点についてはっきりさせながら、相互作用説そのものの可能性を測定するためである。さてリチャーズは、隠喩は二つの観念を一つのものとして与える働きをする、というジョンソン博士のことばに触発されて、隠喩の構成部分として主意／乗物 (tenor/vehicle) の二つを区別している。これはブラックにより、主要主語／補助主語 (principal subject/subsidiary

subject)の区別、あるいは大まかに言って枠／焦点(frame/focus)のそれとして受けつがれた。この区別がすでに語用論的本性のものであり、隠喩の同定の一条件であることは前章で説いたところである。リチャーズの説のあらましは、主意と乗物（それぞれは語句にほかならない）が代表する観念ないし思考が相互に作用しあって、そこに新たに一つの観念もしくは思考が生みだされる、というものである。こうして得られた所産が、彼によれば、いわゆる隠喩の意味にほかならない(12)。

こうした考え方について論ずべき点は多いが、ここではそのうちただ三点のみを指摘するにとどめておく。第一になによりも強調されねばならぬ点は、相互作用説がはじめから隠喩まじりの発言が遂行してみせる意味の新生(semantical innovation)へ照準をしぼっている事実である。隠喩は在来にない新しい意味を生みだす。この直観に相互作用説の一つの根拠がある。この点はブラックにより忠実にひきつがれて、彼はそこから旧来の隠喩理論、すなわち比較説や代理説を批判するのである。というのもこれらの説によっては問題の直観を正しく受けとめられないからである。第二に、リチャードの説は比較説のある側面を決して排除しないという点に注目しなければならない。なるほど彼は比喩の古典論者を名指しで批判している。彼に言わせれば、古典論者はしばしば隠喩の効果は類似の原理に基くと言いながら、都合が悪くなるとまた別の原理（たとえば隣接）を持ちだして首尾一貫していない。実際、類似を後生大事にふりかざすのは誤りである(13)。主意と乗物とが代表する思考が互いに類似することは、相互作用の一つの場合にすぎない。問題はむしろこれら二つの思考の緊張関係、言いかえれば主意と乗物の区別そのものにある。類似とは二つの思考の間にはりわたされた緊張を限定する一つの仕方にほかならないのだ(14)。このようにして、リチャードの相互作用説は、比較説が類似を隠喩の作用因として数える点を、あながち否定するわけではないのである。最後に、リチャードの説が以上の二点をはじめほかにもいくつかの貴重な考察を含むにもかかわらず、もっとも肝腎な相互作用そのものについて何一つ明らかにしていないことを、残念ながら、指摘しておかねばならない。彼はたんに観念や思考の相互作用という言い方を発案したにとどまっている、といって過言ではない。まるで、隠喩が観念の錬金術によって生みだされるようではないか。ちなみに相互作用そのもの、とわれわれが言うとき、それは何も格別な事柄を思い浮べているわけではない。要は、隠喩の生成と解釈を合理的に説明する記号論的機制がリチャードにおいては何一つ明らかになってはいない、と言いたいのである。

ブラックは〈観念の相互作用〉という考え方がそれ自体隠喩にほかならぬことを重々承知している。それでも彼は、そうした隠喩をできるかぎり合理的な、人をふみ迷わすことのないものによって置き変える必要を認めるのである。はたして彼の代案は、その思惑にかなっているだろうか。われわれはここで修辞論の見地から、ブラックのいわば新訂相互作用説がどこまで理論としての権能を保ちうるか、その点を見きわめることにしよう。彼は次の例を引きなが

ら、自説を展開している。

(3) 人間は狼だ
(Man is a wolf)

この発言には二つの主語が区別される。一つは〈主要主語〉(principal subject)「人間」であり、二つは〈補助主語〉(subsidiary subject)「狼」である。(3)によって伝達を意図された意味は、明らかに、主語の字義上のそれではない。人間は狼ではないのである。問題は補助主語に伴う〈互いに連合した常套事項の体系〉(system of associated commonplaces)である（これを以下で簡単のためSと呼ぼう）。Sにはたんに狼にかんする動物学的事実のみならず、決して事実とはいえぬ迷信の類いやまた神話なども含まれている。要するにSは、当該言語共同体の普通の成員が狼にかんして抱く広義の信念を言いあらわすのである。Sの重要な特徴を二つあげておかねばならない。一つは、Sは言語共同体あるいは文化によりその内容を異にするということである。日本人にとってのSと英米人にとってのそれは必らずしも同じとはかぎらないのだ。二つは会話の参加者たちにとってSが容易にかつ迅速に喚起されうるという点である。Sが、常套事項の体系とされた所以である(15)。

このような概念装置は修辞論へ直接引きつがれている。すなわち、隠喩の生成＝解釈過程の一つの基礎は、言語主体の共有する信念にある。この広狭や内容の相違にしたがって、隠喩の実現の様態はさまざまに変化するのである。ブラックは隠喩解釈の過程にも正確な観察をおこなっている。(3)の聞き手は無論その字義通りの意味、言い換えれば真偽にかかわる意味を理解しうるし、また隠喩の解釈にあたっては、そうした意味をまず理解しておかねばならない。ところが、字義上の解釈は、かのSの断片と明らかに撞着するのである。Sにはたとえば〈狼には尻尾がある〉とか〈狼は動物を肉食する〉などが属しているし、〈人間に尻尾はない〉なども含まれている。したがって、人間は狼であるはずがないのである。要するに、(3)の字義通りの解釈は有意ではないのだ。以上が解釈過程の第一段階である。しかし(3)はたんなる偽、それもことば使いの誤りに起因するア・プリオーリな偽として捨てられてもかまわないのではないか。なぜそれは捨てられもせず、なおも解釈の試みのうちに保たれつづけるのだろうか。この点につきブラックはこう述べている。「受容された常套事項のそうした断片を否認することは（……）パラドクスの効果を生じ、正当化への要求を喚び起す」と(16)。偽ではなくパラドクスが出現するには、後にグライスが定式化した会話の協同原理もしくはスペルベルらの有意性原理といった前提が必要であろう。(3)はたんなる言い損いや故意に会話をぶちこわすための発言ではなくて、それもまた会話を円滑に運ぶためになされた発言であるはずだ。これを要請するのが上述の前提であり、この下ではじめてブラックの言う〈パラドクスの正当化〉の過程が火蓋を切られるのである。こうして、隠喩解釈は次の段階へ、すなわち発言への有意性付与の段階へとすすめられねばならない。

それではこの段階では現実にどのような作用がなされるのだろうか。ブラックはこれに答をだすべくいくつかの隠喩を持ちだす。彼によれば補助主語はフィルターだという(17)。(3)は人間にかんするあらゆる経験を、〈狼〉というフィルターで濾過し一定の組織へまとめあげる。換言すれば、人間にかかわるSが狼のSに副うよう再編成されるのである。たとえば、狼のSには〈狼は獰猛である〉、〈狼はいつも腹を空かしている〉、〈狼はいつも相争っている〉などの常套事項が含まれていて、これらのフィルターによって人間のSが組織される結果、人間は獰猛で、いつも空腹で、相争っている、などといった人間のイメージが形造られるだろう。事実は人間はつねに腹を空かせ相争っているわけではない。満ちたりて相和していることも、人間にかんする事実である。しかしそうした側面を狼＝フィルターは濾過しないで取り除いてしまう、というわけである。ブラックはまた次のような比喩も用いている。無数の星が散在する天空を、油煙で煤けたガラス片で覗いてみる。ただしその表面に一定の線がきされた形を煤を削って描いておくとする。私はちょうどこのガラス片をスクリーンとして星を見ることになる。その結果、数多の星はあらかじめ描かれた線形により組織されることになるだろう。補助主語はあたかもこのスクリーンのようなものである。(3)の聞き手は狼のSというスクリーンを通じて人間のSを見凝めることになる。換言すれば、一般に、「主要主語が補助主語の場に〈投射される〉のである」(18)。

隠喩をフィルター、スクリーン（他に「媒質」という比喩も用いられている）で事象を覗くことにたとえたまさしくこの隠喩は、リチャーズの、観念の相互作用といういわば言い放しに比較して、たしかに説明の体裁をそなえているし、隠喩としても秀抜である。しかし、もしもこれを隠喩の解釈理論として見直す場合、少くともこうした隠喩をできるかぎり字義的な散文に置き換える企てが、やはり敢行されねばならない、と言わざるをえない。この点は実はブラック自身が始終自認するところである。当の論文でも、自分の説明が隠喩にほかならぬことは明言されていたし、その論文から二十数年の後、「隠喩と思考」を主題にもたれた研究会議に呈出された論考「隠喩再説」（"More about Metapher"）(19)でも彼は、隠喩を焦点と枠から成る構成物として捉えた点、また〈投射〉という考え方がいずれも隠喩にほかならなかったとあらためて言っているし、また彼によって広くその名が知られるようになった「相互作用」説にも、このように、わざわざ引用符を付しているのである(20)。しかしわれわれは、隠喩の説明をするのに隠喩を用いている点が、ブラックの説の致命傷だ、と言いたいわけではない。もしこの論法で行けば、言語について言語をもって説明する言語学も成立しなくなるだろう。むしろ真の問題は、ブラックが終始堅持しており、われわれもまたそれに与している見地が、その相互作用説でどこまで明らかにされるか、という点にある。すなわち、彼は、隠喩がたんなる感情を喚起する効果しか持たず、認識内容を欠いた文字通りの文飾にすぎぬ、といった見解に対抗して、そうではなくて、隠喩には認識価値が伴うこと、そして隠喩がある意味で新たな意味を創造し

うることを主張している。はたしてこのポイントが相互作用によって明らかになるだろうか。その作用をブラック製の拡大鏡で覗いてみよう。

(3)の聞き手は自らたずさえた共有知識のなかに補助主語にかんするSを持っている。ところが、(3)の主要主語に照らしあわせて、彼はそのSから当面有意性を持つSの断片がどれどれであるかを選別する。たとえば〈人には尻尾がある〉はこのさい関係のない断片である。これに反し、〈狼はいつも腹を空かしている〉とか〈狼は獰猛だ〉などの断片は有意性を持ち、それゆえそれらはとりあげられねばならない。このような選別が完了して後、選ばれたこれら断片の複合に平行し、主要主語「人間」に適合するもう一つの複合が形造られる。その新たな複合には、たとえば〈人間は獰猛だ〉といった断片が含まれているはずである。

ブラック自身が気づいているように、これは説明として循環している。というのも、たとえば〈狼は獰猛である〉から〈人間は獰猛である〉への意味上の〈転換〉(shift)が、それ自体隠喩的だからである。言い換えれば、二つの断片にでる「獰猛である」は決して同じ意味をあらわしてはいないのだ。人間が獰猛であるとは、なにも狐や兎などを襲ってその肉を牙で切り裂くことを言うわけではない。それは、あたかも狼がその餌食をそんなふうにたおすように、そのような隠喩的意味で、人間は獰猛だ、というわけなのである(22)。以上の反問に対するブラックの弁解は次のとおりである。Sの意味上の転換(シフト)はその全てが隠喩的であるとは言えない、換言すれば、少くとも若干の隠喩的ではない「投射」が行われており、隠喩の効果を考えるさい真の問題は意味の転換というよりむしろその〈拡張〉(extension)なのである、と(22)。もとより、これが「転換」を「拡張」と言い替えたのにすぎないなら、説明としてここに半歩の前進すらないことは明らかである。この二つの用語がどうちがうのか、彼はその点について説明らしきものをこう述べている。「なぜなら、〔それら意味上の転換は〕二つの概念体系のあいだの、すでに把握された結合を伴ってはいないからである」と(23)。この主張を精確にどう解すべきか十分にはわからないが、恐らくこうしたことではないだろうか。意味の「転換」という表現は、たとえば〈獰猛〉という概念を例にとっていうなら、狼について妥当する字義通りのそれと、人間についてあてはまる隠喩的なそれと、これら二つの概念があらかじめ(たとえ潜在的な形であるにせよ)存在して、(3)が発言された場合に、一方から他方へいわばスイッチが切りかわるかのような連想を伴いがちである。しかし、そもそも成功裡に演じられた隠喩の仕草の場合には、そうした二元性をはじめから想定してはならない、というのであろう。しかしこれでもまだ説明は消極的な資格にとどまっている。いったい積極的に言って、ここで言われた意味の拡張がいかにしてなされるのか、ブラックの説明は言葉足らずだ、と言わざるをえない。

先に確認された「循環」を免れる仕方は、実は、一つしかないであろう。その一つの道とは、それ自身隠喩的な意味上の「転換」にせよ「拡張」にせよ、それを隠喩の説明項のなかに取りあげずに、

むしろ別にこの種の「転換」を説明する因子を新たに説明項のうちへ導入することにほかならない。ブラックの二つ目の論考で、彼は言葉づかいはやや違えているが、主要主語と補助主語のそれぞれに連合するSが互いに〈同型〉である、と述べている。言い換えれば二つのSには構造の同一性がみとめられ、互いに含まれる断片がさまざまな形態のもとに対応しあっている、というのである。この対応形態として彼は同一性、拡張、類似性、類比、隠喩的適合（metaphorical coupling）などを数えている(24)。このような考え方も、隠喩がすでに実現した後に、遅ればせの観察として受けとるかぎり正しい知見を含んでいるけれども、隠喩の働きの説明とこれを考えるならば、二十年前の論文の域をそれほど出ていない、と評さざるをえないのである。もしも〈拡張〉を前述のように意味の二元性から離れて理解すべきだとするなら、現象の遅ればせの観察結果を現象の説明と混同してはならない。この点は、実は、ブラックその人も気づいていたのである。リクールが明確に指摘したように(25)、ブラックのいわゆる主語に結合した常套事項を、もしも主語に伴う既得の内包（connotations）だとするなら、相互作用説はいわゆる〈死せる隠喩〉すなわち辞書に成句として記載され何らイメージの喚起力を持たぬ隠喩（例、椅子の脚、情熱）だけしか説明してはくれないだろう。というのも補助主語のフィルターは、主要主語が伴う既得の内包を選り分け限定するにすぎないからである。そこでブラックは、喚起性にとんだ隠喩のために、次のような特別の条件を追加したのだった。「隠喩は、すでに受け入れられた常套事項と並んで、種々の含意の特別に作られた体系によっても支えられることがある」(26)。論文の要約で彼が呈示した次の項目も、まったく同じ趣旨にでたものである。すなわち、「これらの含意は通常補助主語にかんする〈常套事項〉から成っているが、いくつかの適切な事例においては、書き手によってアド・ホックに設けられた逸脱せる（ディーヴィアント）含意から成ることもある」と(27)。しかしながら、こうした特別扱いの条件こそ、実は隠喩の通常の働きに欠かせないものなのである。隠喩の生成＝解釈は、有意性を欠く発言にそれを付与する過程にほかならない。そのために言語主体はそのつど「特別に」あるいは「アド・ホックに」目的にかなう含意を手に入れるために必要な演繹前提を、自から「設け」（establish）ねばならないのである。相互作用説が直面するあの循環を免れるために導入すべき因子とは、したがって、前提創出をおこなう〈呼び起し〉（evocation）という操作である。反対から言って、主語に伴うSの範囲で解釈をまっとうしうるあいだは、われわれは隠喩をはじめとする文彩の諸形態に出会ってはいないのである。Sの内部を検索しても、もはや発言へ、有意性を直接にも間接にも付与する断片が見あたらぬ場合に、はじめてわれわれは文彩の形態に面とむかっているといいうるのだ。ではそんな場合はどうしたらよいか。想像力を発動せしめて、適切な含意を得るための前提を設定すべきなのである。

これまでは相互作用説の不備を問題にしてきたが、今度は視角を逆転して、この説に対する全面的否認というべきサールの批判をと

りあげて、むしろ相互作用説の可能性を称揚しようと思う。

サールの批判の論点は多岐にわたっているが、今それを四つにまとめることができよう。第一に彼はブラックが意味にかかわる重大な区別を怠っている、と批判している。すなわち、話し手の意図に結びつく発言の意味／文の意味の区別である。隠喩の意味とはあくまで発言のそれであるのに、ブラックはそれをあるいは文のうちに見たり、あるいは文に伴う観念連合のうちに見たり、混乱に陥っている、というのである(28)。この批判にはサールの隠喩観が反映しているのであって、彼に言わせれば、隠喩とは〈間接言語行為〉に類縁の現象にほかならない。サールの批判をよく理解するために、その背景をなす間接言語行為説にいささか触れておきたい。間接言語行為とは、サールの図式にいう $F(p)$ の形態を表立ってはとらないにもかかわらず、まさに $F(p)$ と同等の機能を果すような発語によってなされる言語行為のことである。ここでFはその値として〈発語内指標〉(illocutionary indication) をとり、p は命題表現をとるものとする(29)。言い換えればそれは、言語行為 $F(p)$ を直接このような形態のもとで遂行するかわりに、これとは別の形で間接的に、しかしそれと同等の行為を遂行するような言語行為なのである。たとえば発言「窓をあけてください」は $!(p)$ という図式であらわされる。それは〈依頼〉という（直接）言語行為である。ところでこれと同じ行為は、この図式にあてはまらぬ別の、たとえば「ひどく蒸し暑い室ですね」という、一見〈断言〉であるような発言――これは $\vdash(p)$ という図式であらわされる――でも演ってみせることができる。この例にみるような現象は、〈文の意味〉と、〈文を使って話し手が言わんと意図した意味〉（これを簡単に〈発言の意味〉と言おう）とを判然と区別しないかぎり決して理解することができない。これがサールの主張の眼目である。同じように隠喩も文に盛りきりの意味とは別の発言の意味を伝達するための手段なのである。

ところでサールの批判は、すでにブラックの探究の視角について確認したところからして、そのまま肯定するわけにはゆかない。ブラックの新しい論文になると、その点はいよいよ鮮明である。そこで彼は本来オースティンの用語であり、話し手の意図の聞き手による把握を言う〈了解〉(uptake) へ言及しているし、かっての論文で自分が「意味上の転換」を云々したさい、もちろんその「意味」とは文のではなくて、話し手のそれにほかならなかった、とも述べているのである(30)。とはいえ、ブラックの論述にあたかも観念なり文の意味なりの相互作用を説いているかのような口吻がみとめられることも事実であって、人を誤解させる点でブラックははなはだ不用意である、と言われても仕方ないだろう。にもかかわらず、ブラックが終始隠喩の語用論に意を用いてきたことは、今は、明らかである。

次いでサールは、相互作用説がつねに意味の〈変化〉(change) を問題にしてきた点を衝いている。隠喩という現象において、厳密に言えば、意味の変化などということはこればかりもありえないのだ。濫喩や成句と化したいわゆる死せる隠喩は表現の意味上の変化

を証拠立てはしない。それらには、たんに意味の交替が伴うにすぎないのである。反対に、生きた隠喩において、文の意味は決して変化することがあってはならない。こうサールは言うのである。このサールの批判は第一のそれにも関連する。実際ブラックが、こう言われても仕方がないような曖昧な言い方をしているのは事実である。われわれ自身すでに、意味上の〈転換〉(shift)というブラックの考え方が字義通りにはうけとれないことを明らかにした。にもかかわらず、ブラックが批判の点にまったく無自覚であるとは言えない。問題なのは意味の〈転換〉ではなくむしろ〈拡張〉だ、と言ってみたり、常套事項にアド・ホックな追加を認めたりする点にもその形跡がうかがわれるが、また別に、ディヴッドソンとのやりとりでのブラックの応答にもその反響を聴きとることができる。これはまえにも述べたけれども、ディヴッドソンは、隠喩の機能の説明にアド・ホックな隠喩的意味を持ちだすことの不当を痛く批判した。これに対してブラックは、確かにそうした〈隠喩的意味〉なる存在者の仮設が無益であることを認めながら、しかし真の問題は、語が隠喩に用いられる都度新たな意味を恒久的に獲得するかどうかにあるのではない、と言う。真の問題はむしろ「隠喩の作り手が、文脈中で彼の使用している語に、改変された意義を結びつけるのかどうか」である、と彼は述べている(31)。換言すれば、隠喩まじりの発言中にある語が用いられる場合、その語の本来の意味が変わるわけではない、そうではなくて、語の使用が自己反射的に語の意義に効果を及ぼして、本来の語義に別種の意義が連合されるのである。

サールの相互作用説批判の第三点は、主要主語／補助主語ないし枠／焦点の区別にかんするものである。これについては前章で詳しく見たのでここでは繰り返さない。

最後にサールは相互作用説に対する「もっとも由々しい」反論をつきつける。その言い分は以下のようである。仮に枠／焦点なる区別が隠喩の一条件であるとしよう。次の例

(4) Sally is a block of ice
（サリーは氷の塊だ）

について言うと、焦点は a block of ice であり、枠の主たる要素は Sally である。ところで前者は普通の名詞句であり、後者は固有名詞に分類される。多言を費すまでもなく、両者が有意味である仕方はまったく別箇なのだ。素性がそのように異なる両者が相互作用するなどとは考えられもしない(32)。以上のような批判はある意味ではもっともであろう。ただし、相互作用説がサールの描写するようなことを本当に主張しているのだとすれば。サールの批判は「相互作用」が曖昧な隠喩でしかない点を鋭く衝いているかぎりで正しい。しかし反面、それは相互作用説を殊更に戯画化している、と言ってもあながちその批判を無体に謗ったことにはなるまい。むしろサールが公平にも認めているように、相互作用説は隠喩の生成＝解釈が「指向性の水準」に位置すること、換言すれば、信念、意

味、観念連合などの諸関係を包括する水準に置かれる点を正しく捉えている。ブラック自身が「相互作用」が隠喩にほかならぬと自認している以上、サールのこの批判にはいささか同情が欠けていると言わざるをえないのである。

これまでブラックの相互作用説を裏と表の両面から検討してきた。われわれはそこから、それが本来の理論としての可能性を修辞論の中でこそ蘇生せしめうること、したがって、相互作用説は修辞論への示唆多い先駆けとして十分な評価に値することを結論として抽きだすことができる。さらにわれわれはもう一歩をすすめて、批判者サールの隠喩理論の制約を以下に露わに呈示しておきたい。ただしその波及する範囲ははなはだ広いので、ここではもっとも基本的な論点に考察を絞って、他の側面については別の機会に論及することにしよう。

サールは、先に述べたように、隠喩の問題とは、あることを語ることが別のことを意味することであるのはいかにして可能か、という問題であるとした。彼によれば、隠喩の解釈とは、隠喩を作るのに使用された文の意味から発言の隠喩的意味を計算する操作にほかならない。前者を今 S is P, 後者を S is R という図式であらわすことにしよう。すると、隠喩の解釈とは S is P⟶S is R という変換もしくは翻訳以外のものではないのである。サールはここで自明のことを述べているように見える。けれどもここに横たわる原理の重要さを軽々しく見逃すべきではない。右の図式で代表されるようなサールの隠喩理論の原理とは何か。それは、隠喩が字義通りの翻訳を許容する、という要請にほかならない。実はこの原理はたんに隠喩のみならずあらゆる言語表現にひとしく妥当する形で、一般的に、〈表現可能性原理〉(The Principle of Expressibility)として以前から表立って彼が主張していたものなのである(33)。サールはこの原理についてこう述べている。

> 意味されうるものはすべて語られうる、ということを、私は言語にかんする分析的真理と見なす。所与の言語は、私がその言語において意味するものを語るに足るだけの豊かな構文論ないし語彙を持たぬことがあるかもしれない。しかしこの貧弱な言語を補うこと、あるいは、もっと豊かな言語で私の意味するものを語ることについて、原理的には何の障碍もない(34)。

これはまえの図式 $F(p)$ と並んで、いかにもサールらしい割り切った考え方である(35)。もしもサールの言う「意味」がもともと「語られるもの」を意味するなら、言うまでもなく、この原理は見掛けだおしにしかすぎない。それゆえ、原理が有意義でなければならないとするなら、意味が少くとも語られるものと事実上つねにずれていることを要すのである。この想定によってはじめて引用中の「原理的に」という措辞も生きてくるだろう。それゆえこの原理を攻略する手だては、ただ、このずれが事実上のものではなく、およそ意味なるものに対して構成的な素性であることの論証に存している。

そして実際われわれはそうした論証が可能だと信じる者である。一般に、記号によって〈代表されるもの〉あるいは〈語られるもの〉と、それにおいて〈呈示されるもの〉あるいは〈示されるもの〉とを区別しなければならない(38)。換言すれば、記号は語り／示しの両つの様態で意味をなしうるのである。エジプト学者ガーディナーは、語や文に内容と形態とを区別した。〈語形態〉(word-form)とは語の本来の意味、あるいは内容につけ加えられた特殊な意味を言う。もっとも単純な例をあげよう。英語の in はその内容として〈のうちに〉という関係を代表すると同時に、まさにその形態の裡に己れが前置詞であるという素性を示すのである。この見地はそのまま文へ拡張しうるだろう。たとえば Please, pass the jam!（ジャムをとって下さい）という文はある種の事態を語ると同時に、己れが〈要請〉という文性質（sentece-quality）を持つ事実をその形態そのものにおいて示すのである。このように、記号の〈形態〉とはあたかもある楽音がなりひびいたさいそれに伴なう倍音のようなものだ。こうしたガーディナーの見解で注目すべき点を今一度確かめておこう。それは第一に、記号における内容／形態の区別であり、第二に、この双方がいずれも記号の意味にかかわるという点である。彼は記号の形態をしばしばその〈補助的意味〉(subsidiary meaning)と呼んでいる(37)。こうした区別はわれわれに、ウィットゲンシュタインが『論理哲学論考』で設けた重要な区別、語られうるもの／示されうるもの（was gezeigt werden kann/was gesagt werden kann）という区別を想起させずにはおかない。彼によれば、命題はそれのそなえる論理形式について語ることができない。それはたんに命題そのものにおいて示されるにすぎないのである。彼はただ一つの区別を持ちこむのに甘んじたわけではない。それだけならラッセルのような人も特に反対はしなかっただろう。というのも、ラッセルもまた記号がつねに自己について語りうるとは考えなかったからである。しかしウィットゲンシュタインは言う、「示されうるものは語られえない」と(38)。言い換えれば、ある命題 *p* の形式については、*p* によってはもとより他のいかなる命題によっても何一つ語ることができない、というのである。こうして問題の区別は絶対化される。この点にウィットゲンシュタインの見解の著しい特色が存している。なぜこのような絶対化がもたらされたかについては、一つの解釈として(39)、こう考えることが許されるだろう。ウィットゲンシュタインは言語の機能をたんに描写にある、と見るのみならず、写真が風景を写すような特有の仕方で描写することにある、と考えた。これがいわゆる言語のピクチャー理論である。たとえば地図は地形のありさまを描写する。しかし地図上の等高線やさまざまの記号は、地図が地形を描写する仕方を描写することができない。絵画の表現としての際立った特徴は、とメルロ・ポンティも言っている、それは、絵画について絵画することができない点だ、と(40)。

サールの表現可能性原理は、記号の意味に対する〈示し〉の寄与をまるで認めていない。しかしそうした見地が記号の実相にいかに遠いかは、〈侮辱〉や〈あてこすり〉といった言語行為を考えてみ

ればわかるだろう。これらの行為の特色は、それらを行うのに使用される文の性質あるいは発言の行為値を表立って語るやいなや、行為が頓挫をきたしてしまう点にある。たとえば聞き手に向って「私は君が少々頭が悪いとあてこすります」などと言おうものなら、そうはあてこすったことにならないのである。あてこすりは語られえない。それはただ実際に演ってみせる、つまり、示すことができるだけなのだ。しかしこれらの例は数少ない例外に属すのではないか、という疑いが生じるかもしれない。ほとんどの言語行為が――直接的、間接的の相違は問わず――サールが定式化したように F(p) という構造を持ってはいないだろうか。たとえば「来月までにきっと返済します」という発言は〈約束〉の遂行にあたる。この種の「原初的実演発語」(オースティン) は、一見すると「表立った実演発語」へ、すなわち、「私はあなたに、来月までにきっと返済すると、約束します」という発言へ言い替えることができるように思われる。そして発言中の二つの句点に挟まれた部分が語られた命題をあらわし、その他の部分が発言の行為値をあらわすというわけである。しかし、「約束します」という文言は己れが約束であることを語っているわけでは決してない。それは実際に己れのそうした素性を展示し、身をもって演って見せているにすぎない。このかぎりで、もしも「表立った」(explicit) ということが〈語られうる〉という可能性〉を意味するならば、どのような実演発語も決して表立たせることができないのである。

われわれは次に、表現可能性の原理が、総じて文彩の息の根をとめてしまうという恐るべき事実を指摘しなくてはならない。もしも隠喩が意味するところが全部語られうるならば（ということは、隠喩が字義的翻訳を容れるならば、という仮定と同じである）、人はなぜはじめから字義通りに述べることをせず、わざわざ隠喩などという紛らわしい廻り道を選んだのだろうか。隠喩の存在理由とはなにか。くだんの原理から出発してこの問に答を見出す企ては、必らず失敗する。というのも、表現可能性原理が隠喩に与えうる唯一の理由、それは〈偶然〉以外にないからである。隠喩はいわば言語の表現力にとっての余剰であり無くてもいっこうかまわぬ贅沢品なのだ。ところでサールも S is P という隠喩を述べることがたんに S is R を述べること以上の仕事をする (do more) と明言している(4)。彼の言いたいのはこうである。S is P と述べることは、事実上、S is R と述べることとは違う。この事実上の差は、話し手が S is P の意味を経由して S is R の陳述を行うことに起因するのだ。しかし、これではたんに問題が一段ずらされたにすぎないことは明らかである。われわれはこう問うことができるし、問わねばならない。いったいなぜそうした経由が必要なのか、と。これに対するありうる唯一の回答は、当該言語のなかに直接 S is R という表現手段がないという事実上の欠陥であろう。しかしこれはわれわれとしてはうけとれない。というのも隠喩はそれが語るところのものによるよりも、それが示すところのものによって効果を発揮するからである。今一度(3)を見てみよう。(3)のごく大雑把な解釈を次のようにあらわすことができる。

(5) 人間は残酷な生き物だ（人間の残酷さはあたかも狼のそれに喩えて表わすことができる）

この初めの命題はおおよそ(3)が語るところのものに相当する。そして括弧に入れられた部分こそ(3)が呈示し、指し示している(3)自身の形態であり、いわば(3)の仕草なのである。(3)の解釈がどのように運ばれるかは、すでに類例について述べたのでここでは繰り返さない。ここで明らかにしておきたいのは、隠喩の有する表出力、あるいはイメージの喚起力は、サールのような立場からは決して捉えられないという困った事実にほかならない。

最後に、隠喩の表出力についてサールがどのように考えたかを吟味して、われわれの相互作用説再考をしめくくろう。S is P→S is Rという翻訳を規制する原理としてサールは八つを数えている。しかし、これで全てを枚挙したわけでもないし、また必ずしもそれぞれが独立でもないかもしれぬ、とサールは但し書きを加えている。そのうち一つだけ見本の意味でここに披露することにする。それは〈原理一〉と称されたものであって、Pなる事物が定義によりRである、という規制原理にほかならない。たとえば「サムは巨人だ」から、聞き手はただちに「サムは背が高い」を割りだすだろう。この計算に用いられたのがここに引いた原理なのである。というのも、巨人は定義により背が高いからだ。その他の原理を逐一例示する必要はないだろう。ここで問題にすべきは、要するに、これら数々の原理の前提をなすサールの考え方である。こうした原理がRを計算するさいにどのように作用するか、少し詳しく見ることにしよう。Pにはあらかじめ種々の観念連合が結びついている。このPに主語Sがあてがわれることによって、Pの観念連合の全範囲が一定の領域に限定され、Rが割りだされるのだという。先ほどの例で説明しよう。〈巨人〉はまずもって〈背が高い〉と連合している。これは、すでに述べたように〈巨人〉の定義による。その他にも、たとえば〈巨人〉はたまたま英語圏では〈男である〉と結びついている（giant はそれゆえ〈大男〉とも訳しうる。ちなみにドイツ語でも〈巨人〉は男性名詞 der Gigant, der Riese であらわされる）。以上をはじめ、さまざまな観念連合がPとRとの間に架けわたされているはずである。サールの考え方のポイントはここに横たわっている。つまり、PとRとの間にすでに樹立されたなんらかの連合が存在しなければ、どのような戦略を用いようとも、Rの計算はとうてい不可能なのだ。彼はR計算のための原理として、PとRとの〈並列〉（juxtaposition）を認めていない。それは彼の相互作用説否定の見地からして、当然の態度だと評しうるだろう。というのは、「相互作用」はSとRとの並列があたかも既存の連合の束には含まれない、新たな連合を両者の間に割出するかのように働くからである(12)。次の二例を対照させながらサールは「相互作用」のありえぬことを再度説いている。

(6) Sam's voice is gravel

（サムの声は耳障りだ）

(7) Kant's second argument for transcendental deduction is so much gravel

（カントの超越論的演繹のための第二の論証はひどくわかりずらい）

両者で同じP（gravel）が現われているが、しかしそれぞれのRは異っている。(6)ではサムの声が聞き手に不快に感ぜられる次第を述べているのだが、(7)がそれとは別のことを言っているのは明らかである（カントの声は、残念ながら、磁気テープに記録されてはいない）。これを見ると、あたかもSとPの並列が新たな意味Rを生むという観察が正しいように思われるかもしれない。しかしサールに言わせれば、そう見るのは誤りである。先述のように、Pには複数の観念連合がすでに伴っている。要は異なるSによるその連合の束の限定の様態が、(6)と(7)とでちがっている、というにすぎないのだ。こうして、サールは隠喩に対し斬新さという徳を拒むのである。

ところでこれは事実に反するのではないだろうか。詩人はかって存在しなかった隠喩をそのつど創りだすし、読者も絶えて接したことのない隠喩に出会って、それをただちに理解し、目を見はる思いをすることが、たしかにある。隠喩のもたらす斬新さは、かってチョムスキーが問題にした言語の生産性、すなわち話し手はかって学習したことがない文を機会に応じて作りうるし、聞き手もまた一度も耳にしたことのない文をただちに理解しうる、という言語の革新性と同じ理論的重要性をそなえた一箇の問題だと言わねばならない。たしかに、錬金術じみた「相互作用」説では、この問題を解くことはできない。しかし、相互作用説を今一度修辞論へ包摂して、そこから改めてサールの詰問に応じることは可能なのである。観念の相互作用などはありえない。その代りに、われわれは、有意性を欠く発言にそれを付与するために、想像力が発動されて、必要な含意を導出するための前提が算段されるのだ、と考えよう。ここには何の困難もないし、同時に、隠喩の漸新さも説明されるのである。新しい意味が作られる、と言うより、むしろ、あたかも相互作用がなされているかのように事態がとり運ばれるのに必要な、新たな論理的前提が作られるのである。隠喩の解釈過程には、前提創出の操作が、換言すれば〈呼び起し〉（evocation）の操作が含まれる、としなくてはならない。

サールとわれわれとの相違は、どうやら、根本的には発語の〈意味〉の捉え方に淵源すると思われる。サールに言わせれば、隠喩が字義的言い替えを原理的に許すのは、一つの自明事である。この場合、S is P→S is R という変換におけるRの「意味」とはRの真理条件にほかならない(13)。このような主旨で「翻訳」が云々されているなら、われわれに何も反対すべきすじあいはないが、しかしわれわれにとり看過できないのは、むしろ〈意味〉のそのような事象化なのである。記号の意味は、たんにそれが代表するもの、語るところのもののみならず、記号の示すところのもの、その形態や色彩などから構成されている。S is P はたんに一定の真理条件を計

算そるだけではない、それはいわば己れの不透明な肉体でもって、意味を演じてみせるのである。（未完）

註

(1) Black, M., "Metaphor" in *Models and Metaphors*, 1962, p. 25.

(2) Lakoff, G. and M. Johnson, *Metaphors We Live By*, 1980, p. 119f.

(3) *Ibid.*, p. 121.

(4) *Ibid.*

(5) Grice, H. P., "Meaning" reprinted in Strawson, P. F. (ed.), *Philosophical Logic*, 1967 を参照。

(6) Black, M. *op. cit.*, p, 26, p. 27, etc.

(7) *Ibid.*, p. 28.

(8) *Ibid.*, p. 29.

(9) Chomsky, N., *Aspects of Theory of Syntax*, 1965, p. 149. ここで言う〈素性〉は本来チョムスキーによって構文論的本性のものとされていた。例に即してこの点を説明しよう。変形文法における最小の機能単位（形式素 formative）に数えられる名詞、たとえば woman が構文素性〔＋生物〕を有するということは、それがたとえば関係詞としては which ではなく who をとる、といった構文論的性状と同じ平面に属するというのである。しかしながら、選択制限なる現象は、語の意味にかかわるがぎり、構文論よりむしろ意味論上の事柄であって、選択素性や〔＋生物〕といった構文素性は意味論の範囲で処理すべきだという考え方もある。いずれに与するにせよ、語用論以前的水準で隠喩を扱う点では変わりがないということを、ここで指摘しておきたい。

(10) Black, M., *ibid.*, p. 29.

(11) *Ibid.*, p. 30.

(12) Richards, I. A., *The Philosophy of Rhetoric*, 1936, 1965, p. 93f. ; p. 97 に tenor/vehicle の区別が示されている。

(13) *Ibid.*, p. 107.

(14) (15) *Ibid.*, p. 120, p. 124.

(15) Black, M., *op. cit.*, p. 40.

(16) *Ibid.*, p. 16.

(17) *Ibid.*, p. 39.

(18) *Ibid.*, p. 41.

(19) Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979 に所収。同じ頃に属する別の論考 "How Metaphors Work : A Reply to Donald Davidson" in Sacks, S. (ed), *On Metaphor*, 1979 でも同趣旨の発言がみられる。

(20) Black, M., *ibid.*, p. 28f.

(21) Black, M., "Metaphor", p. 42.

(22) *Ibid.*

(23) *Ibid.*

(24) Black, M., "More about Metaphor", p. 30.

(25) Ricoeur, P., *La Metaphore vive*, 1975, p. 114f.

(26) Black, M., "Metaphor", p. 43.

(27) *Ibid.*, p. 44.

(28) Searle, J. R., "Metaphor" in Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979, p. 100.

(29) Searle, J. R., *Speech Act*, 1969, p. 31.

(30) Black, M., "More about Metaphor", p. 29.

(31) 菅野盾樹「文彩―修辞の記号論から修辞の認識論へ」本誌第三号（一九八二）一〇ページ参照。

(32) Searle, J. R., "Metaphor", p. 104.

(33) *Speech Act*, 1969, §§ 1. 4-1. 5.

(34) *Ibid.*, p. 17.

(35) サールは、たとえば Sam smokes habitually と Does Sam smoke habitually ?, Sam, smoke habitually ! の三つの発言は同一の命題

をあらわし、たんに各々の発語内の力において異ると考え、発言のそれぞれを ⊢(*p*), ?(*p*), ! (*p*) と図式化する。問題は三つの発言の共通分母をこのような形で命題として抽象しうるかにある。動詞の法（叙実的、命令的等）の役割を考えてみればよい。それはたんに発言によって演じられる行為の型を特定化する働きのみならず、また独特な仕方で主語と述語を結合する機能をも持っている。例の最初の発言中の smokes と最後の例の smoke とは、それぞれ異る仕方で、しかも発語内的意味において、主語と述語を結んでいるのである。それゆえ、サールのような分析は大雑把にすぎると言わねばならない。この批判は Gochet, P., Esquisse d'une théorie nominaliste de la proposition, 1972 による。

(36) レカナティ『ことばの運命』新曜社、一九八二、第七、八章は仔細にこれを説いている。

(37) Gardiner, A., The theory of Speech and Language, 1963², § 41.

(38) *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1961, 4. 1212.

(39) Hartnack, J., *Wittgenstin and Modern Philosophy*, 1962, p. 28.

(40) Merleau-Ponty, M., *Signes*, 1960, p. 100; *La Prose du monde*, 1969, p. 143. しかし絵画にもおそらくいわば語り／示しの区別を設けることができるだろう。もしこれが可能ならば、絵画は己れについて反射的に語りえないという意味で、メルロ・ポンティの言うように絵画にはメタ絵画が存在しないというのは事実である。しかし絵画の示しの次元においては、それは己れについて何事かを意味しうるだろう。絵画のパロディ、ピカソ、ダリなどの作品を想起せよ。

(41) Searle, J. R., "Metaphor", p. 123.

(42) ブラック説は当然〈並列〉を許容するだろう。真の隠喩がこの並列を原理として新たな意味を創出する点を強調したのは Wheelwright, P., *Metaphor and Reality*, 1975 である。著者はとくにその種の隠喩を〈ディアホール〉(diaphor) と呼んだ。

(43) Searle, J. R., *ibid.*, p. 121.